

花散里

渋谷栄一訳

花散里の物語

「第一段 花散里訪問を決意」

誰知らぬ、ご自分から求めての物思いは、いつといつて絶えることはないようであるが、このように世間一般のことにつけてまでも、めんどろにお悩みになることが増えてゆくので、何となく心細く、世の中をおしなべて嫌にお思ひになるが、それも行かないことが多かった。

麗景殿と申し上げた方は、宮たちもいらっしやらず、院が御崩御あそばした後、ますますお寂しいご様子を、わずかにこの大将殿のお心づかいに庇護されて、お過ごしになっているのであろう。

御令妹の三の君、宮中辺りでちょっとお逢いになつた縁で、例のご性格なので、そうはいつてもすっかりお忘れにならず、熱心にお通い続けるといふでもないの、女君がすっかりお悩みきつていらっしやるらしいのも、このころのすっかり何もかもお悩みになつて世の中の無常をそそる種の一つとしては、お思ひ出しになると、抑えきれなくて、五月雨の空が珍しく晴れた雲の切れ間にお出向きになる。

「第二段 中川の女と和歌を贈答」

特にこれといったお支度もなさらず、自立たぬようにして、御前駆などもなく、お忍びで、中川の辺りをお通り過ぎになると、小さな家で、木立など風情があつて、良い音色の琴を東の調べに合わせて、賑やかに弾いて

いるのが聞こえる。

お耳にとまつて、門に近い所なので、少し乗り出してお覗き込みなされると、大きな桂の木を吹き過ぎる風に乗つて匂ってくる香りに、葵祭のころが思い出されなまつて、どことなく趣があるので、「一度お契りになつた家だ」と御覧になる。お気持ち騒いで、「ずいぶんと過ぎてしまつたなあ、はつきりと覚えているかどうか」と、気が引けたが、通り過ぎることもできず、ためらつていらっしやる、ちよつどその時、ほととぎすが鳴いて飛んで行く。訪問せよと促しているかのようなので、お車を押し戻させて、例によつて、惟光をお入れになる。

「昔にたちかえつて懐かしく思はずにはいられない、ほととぎすの声だかつてわずかに契りを交わしたこの家なので」

寢殿と思われる家屋の西の角に女房たちがいた。以前にも聞いた声なので、咳払いをして相手の様子を窺つてから、ご言伝を申し上げる。若々しい女房たちの気配がして、不審に思つているようである。

「ほととぎすの聲ははつきり分かりますが、どのようなご用か分かりませんが、五月雨の空のように」

わざと分からないというふりをしていると見てとつたので、

「よろしい。植えた垣根も」

と言つて出て行くのを、心の内では、恨めしくも悲しくも思つたのであつた。

「そのように、遠慮しなければならぬ事情があるのであろう。道理でもあるので、そもいまいかまい。このような身分では、筑紫の五節がかわいらしげであつたなあ」

と、まづ先にお思ひ出しになる。

どのような女性に対しても、お心の休まる間がなく苦しうである。長い年月を経て、やはりこのように、かつて契つたことのある女性には、情愛をお忘れにならないので、かえつて、おおぜいの女性たちの物思ひの種なのである。

「第三段 姉麗景殿女御と昔を語る」

あの目的の所は、ご想像なさつていた以上に、人影もなく、ひっそりとお暮らしになつて居る様子を御覧になるにつけても、まことにおいたわしい。最初に、女御のお部屋で、昔のお話などを申し上げなさつて居るうちに、夜も更けてしまった。

二十日の月が差し昇るころに、ますます木高い木蔭で一面に暗く見えて、近くの橘の薫りがやさしく匂つて、女御のご様子、お年を召しているが、どこまでも深い心づかいがあり、気品があつて愛らしげでいらつしやる。

「格別目立つような御寵愛こそなかつたが、仲睦まじく親しみの持てる方とお思いでいらしたなあ」

などと、お思い出し申し上げなさるにつけても、昔のことが次から次へと思ひ出されて、ふとお泣きになる。

ほととぎす、先程の垣根なのであつたか、同じ声で鳴く。自分の後を追つて来たのだな」と思われなさるのも、優美である。どのようにつけてか、などと、小声で口ずさみなさる。

「昔を思ひ出させる橘の香を懐かしく思つて、ほととぎすが花の散つたこのお邸にやつて来ました。昔の忘れられない心の慰めには、やはり参上いたすべきでした。この上なく、物思ひの紛れることも、数増すこともございました。人は時流に従うものですから、昔話も語り合える人が少なくなつて行くのを、わたし以上に、所在なさも紛らすすべもなくお思ひでしょう」とお申し上げなさると、まことに言うまでもない世情であるが、物をしみじみとお思ひ続けていらつしやるご様子が一通りでないのも、お人柄からであるうか、ひとしお哀れが感じられるのであつた。

「訪れる人もなく荒れてしまつた住まいには、軒端の橘だけがお誘いするよすがになつたのでした」

「ただけおつしやるが、そうはいつても、他の女性とは違つてすぐれてゐるな」と、ついお思ひ比べられる。

「第四段 花散里を訪問」

西面には、わざわざの訪問ではないように、人目に立たないようにお振る舞いになつて、訪れなかつたのも、珍しいのに加えて、世にも稀なお美

しさなので、恨めしさもすっかり忘れてしまひそうである。あれやこれやと、例によつて、やさしくお語らいになるのも、お心にないことではないのであつた。

かりそめにもお契りになる相手は、皆並々の身分の方ではなく、それぞれにつけて、何の取柄もないとお思ひになるような方はいないからであるうか、嫌と思わず、自分も相手も情愛を交わし合ひながら、お過ごしになるのであつた。それを、つまらないと思う人は、何やかやと心変わりしていくのも、無理もない、人の世の習いだ」と、しつてお思ひになる。先程の垣根も、そのようなわけで、心変わりしてしまつた類の人なのであつた。

